二〇〇〇年十二月十二日 第三種郵便物承認 毎月（1・2・3・4・5・6・7・8の日）発行 発行人 関西障害者定期刊行物協会 大阪市天王寺区真田山町二の二 東興ビル4F

KSKS ゆいゆい通信

No.130　24.4.28

編集人　社会福祉法人　寧楽ゆいの会
〒631-0823　奈良市西大寺国見町3-5-5
TEL/FAX　0742-41-6039
URL　http://narayuinokai.or.jp

定価　1部50円
年間　300円

◆法人からの報告
「職員不足で生訓休止
　ニーズと解離　報酬改定」
　理事　大田　雅子　…1

◆Reports
◇ひまわり「BALBALクラブ」交流
◇一般専門職員研修開催　…2

◆Reports
ぽすと／歩っと地活　…3
D－PORT／ぐっど・たいむ　…4

◆information
2024年度職員配置　…5
第33回こころの講演会　…6

職員不足で生訓休止
ニーズと解離　報酬改定

新年度となりました。2月初めには障害福祉サービス等の報酬改定の概要案が出され、ゆいの会も運営する生活介護事業や就労継続事業B型にとって厳しい改定内容となっています。

「きょうされん」が2023年に実施した「職員不足の実態調査」では、2022年度に採用できた正規職員数の充足率は、官公庁・民間企業等の81.3%に対し、障がい福祉事業所は53.5%と半分にとどまっていたということがわかりました。2月16日にきょうされんが出した声明「とうてい納得できない『2024年度報酬改定』 ーその問題点と課題ー」の中で、今回の報酬改定により、「障害福祉に『危機的な影響』を及ぼしかねない」としています。

ゆいの会では第5回理事会を3月6日に、第2回評議員会を3月30日に行ないました。

内容は以下のとおり。

・事業報告（12月～2月）
・2024年度事業計画・予算案
・補正予算（案）
・施設長人事（案）
・個人情報保護規程要領及びマニュアル等
・運営規程改訂
　（相談支援事業所歩っと・こもれびB型）

法人の事業計画としては、①本部機能（業務整理・分担、人員配置等）の検討 ②等級表、人事考課制度運用の見直しのためのワーキングチームを再開 ③生活介護事業の方向性を検討 ④実態調査の内容検討 ⑤社会福祉充実計画におけるさわやぎの大規模改修に向け、検討を行ない2025年度の実施を目指す といったことがあげられています。

また、生活訓練事業については、法人全体の人員不足の問題があり、残念ながら7月末をもって事業休止の措置を取ることとなりました。事業を開始した2015年から約10年間、外出することが困難な方や、様々な生活課題を持つ方などに対し、利用者自身が持つ「強み」に着目しながら、個別の訪問や同行による細やかな支援を継続してきました。新たな利用希望の声もあるため、今後また再開させるためにも人員の充足は喫緊の課題です。　（大田雅子）

Reports

「病院との協働が大事」

寝屋川BALBALクラブと交流

奈良市で精神科入院者に地域の風を届ける活動をしている「ひまわり」が、地域活動支援センターあおぞら(寝屋川市)の当事者グループ「BALBAL(バルバル)クラブ」とオンライン交流会を開きました。

「ひまわり」ではコロナ禍以降、病院訪問ができなくなり、地域生活を綴った「ひまわり新聞」を届けたり、オンラインでの交流会を開いたりしてきました。今後の展開のヒントを得るため、先進的な取り組みを学びたいと企画されました。

3月13日の交流会当日は、中部公民館の講義室にひまわりのメンバー9人とスタッフ8人が集まり、Zoomでつながった画面の先には「あおぞら」のスタッフ2人と「BALBALクラブ」の3人。同クラブも病棟訪問活動を「ひまわりの会」と呼んでおり、コロナ禍以降は「ひまわり新聞」を病院に届けていたという偶然の一致がありました。同クラブは、2006年から“当事者だからできる活動をしよう”をモットーに、自らの体験を語る『語り部活動』や月1回の『ミーティング』、2ヵ月に1回ねや川サナトリウムを訪問する『病棟訪問活動』を行なってきました。しかし、2020年には奈良と同じく病院訪問ができなくなり、「患者さんの顔が見られない」「病棟の様子もわからない」と焦りや歯がゆさが募ったといいます。そこで、毎号“スイーツ情報”や“長期入院中に思っていたこと”などの決まったテーマでメンバーが執筆した「ひまわり新聞」や、メンバーの1日の過ごし方を撮ったビデオレターを病棟に届けたり、スーパーのチラシの値段を隠して野菜や弁当の値段を当てる「チラシでクイズ」を作成して病棟のOTの時間に活用してもらったりしました。

質疑応答では、支援者と当事者の協働に大切なこととして「当事者、支援者それぞれの役割がある。互いの思いの尊重もだし、軸は入院者の思いを尊重すること」、ピア活動での誇りについては「語り部活動でも病棟訪問でも自分の人生、1人1人の生き方が財産になる。自分の貴重な財産を仲間に伝えられる」ことだとの話がありました。

奈良のひまわりとの大きな違いは、1法人内のグループであること、病院との調整は大阪府の「地域精神医療体制整備広域コーディネーター」が主に担っていることです。BALBALクラブでは2023年度から病棟訪問が再開しています。奈良の活動には「法人の枠を超えてたくさんの人が集まっていることは素晴らしい。病院の協力がないと活動自体が難しいため、病院と協働できる関係性を作れたら」とのアドバイスをもらいました。

(江端いず穂)

研修部

一般専門職員研修

～虐待防止について学ぶ～

就労継続支援B型の3事業所に配属されている一般専門職員(調理員、栄養士など、福祉以外の専門職)を対象にした虐待防止研修を2月に実施しました。社会福祉事業に関わる者として、日々の利用者との関わりの中で虐待や権利侵害のリスクを認識しておくことは職種に関わらず必要です。しかし、一般専門職職員の多くがパートタイム、シフト制で働いているため、外部の虐待防止研修には参加しづらい状況です。一般専門職員全員が研修を受講できるように、今回は一般社団法人日本福祉事業者協会が実施している虐待防止研修の動画を活用し研修を企画しました。

障害者虐待防止法の概要やICFなど12種類のテーマで構成され、各テーマ10分程度の動画でわかりやすく解説されており、それぞれのタイミングで研修を受講できました。参加者からは「スピーチロックという言葉による見えない拘束もあることを知った」「ICFという言葉を初めて知り、プラスの面を見ていくことが大切だと感じた」「自分の思い通りにしたいと考えを押し付けることは虐待につながりかねない」という感想がありました。

制度から当事者と関わる上で必要な視点まで幅広い内容について学べ、しんどさの理解につながる機会にはなりましたが、「動画の内容を実際の業務に繋げ学びを深めることが個人だけでは難しい」という声もあがりました。振り返りの時間を設けるなど、参加者の学びを業務に活かしていけるよう、研修を企画したいと思います。

(河部香澄)

ぽ す と

きょうされん　パン・製菓交流会

きょうされん奈良支部主催の『パン・製菓 実践交流会』が3月20日（水）にあり、メンバー3人、スタッフ1人が参加しました。きょうされんは、「地域や国レベルで障害者福祉の充実と発展をめざして運動をすすめている組織で、障害のある方が様々な資源を活用しながら社会に参加し、誰もが住みよい地域づくりを目指して」活動しています。ぽすとは加盟していませんが、今回の交流会は他の事業所の取り組みを知ることを目的に加盟していない事業所も参加することができました。

当日は13事業所から30人以上が参加。まずは4事業所から活動と実践の報告がありました。ぽすとも菓子製造や店舗運営などの取り組みについて発表し、メンバーはお勧めのクッキーや販売会の案内をしました。その後の試食会・販売会では、それぞれの商品を手に取りながら工夫していることや味の感想など意見交換しました。ぽすとのクッキーには「動物クッキーが可愛く、子どもが喜ぶと思う」「レモンクッキーは皮を入れ込んでいることでより味に深みが出ている」などの感想がありました。

◀写真を使って「ぽすと」を紹介

他の事業所の取り組みや工夫を知るとともに自分たちの商品に対する意見をもらえる機会となりました。コロナ禍で商品が売れず苦悩したことや現在は材料費の高騰に頭を悩ませているなど、製菓作業ならではの悩みや困りごとを共有することができました。今回のつながりを活かしながら、よりよい商品を作り、障がいのある人が活躍できる場を広げていきたいです。　（宮崎涼真）

歩っと地活

家族の声から見えてきた課題

～令和5年度 家族懇談会～

歩っとでは年1回、メンバーの家族を対象とした懇談会を行なっています。近年はコロナウイルス感染拡大のため希望された家族と担当スタッフが個別面談をする形をとっていましたが、令和5年度は従来通り全体で実施することができ、6人の参加がありました。

当日は、それぞれ当事者への思いや懇談会の参加目的などを織りまぜながら自己紹介してもらいました。その後、スタッフから令和5年度の活動報告をしました。参加者からはプログラムに関する質問があったほか「気軽に行ける場所があって助かっている」「どこにも行き場のない当事者・家族は大勢いる。市内に地活がもっと増えてほしい」といった声があがりました。

懇談では『介護』や『高齢化』というワードを中心に、『親亡き後の暮らしの心配』として、住まいや金銭管理の不安、どのようなサービスが利用できるのかなどの質問がありました。また「高齢になり、庭の草刈りや手入れができなくなってきた」という話に多くの方が共感されており、親やきょうだいがこれまで通り家庭内での役割を担うことが難しくなってきていることがわかりました。また高齢の親の介護を担い疲弊しているという相談をメンバーから受ける機会が増えてきていて、家族や当事者だけでは対応しきれない問題が徐々に顕在化してきています。

懇談会終了後には、欠席者も含め今後の開催方法や時間帯、内容に関するアンケートを取りました。『どのような家族懇談会を希望されますか？』という質問には「当事者・家族の高齢化による問題について考える機会を設けてほしい」という回答が最も多く、次いで「家族同士で語り合えたり、情報交換ができる時間がほしい」「歩っとの活動内容や今後の方針について詳しく聞きたい」という回答が複数ありました。

家族懇談会は、家族の思いを直接聴かせもらえる貴重な機会です。今回、親としての苦労や将来の不安も具体的にあがり、メンバーだけでなく家族も含めた支援の必要性を感じました。懇談会の場だけでなく、個別面談や電話、自宅への訪問など、歩っとではご家族の皆さんにもいつでも気軽に相談してもらいたいと考えています。　（藤田真衣）